

「疑い」のススメ

山崎道子

奨励者紹介[やまさき・みちこ]

日本キリスト教団豊中教会牧師

十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさしたが、それはこの書物に書かれていない。これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

(ヨハネによる福音書 20 章 24—31 節)

良くないこと?

今日の聖書はイエスの十二弟子の一人の話です。トマスという弟子なのですが、彼はイエスが復活したという話を聞いてもそれですぐには信じず、「自分の目でイエスの手の傷跡を見、さわって見ないと信じない」と言ったという場面です。そもそも十二弟子のひとりと言っても、トマスという弟子はあまり目立たず、ほぼここにしか登場しません。そのせいで彼には「疑い深い」トマスというイメージが付いてしまいました。

疑うということで、聖書からはちょっと話が離れてしまいますが、去年の4月1日、エイプリルフールの日、我が家の子どもたちをちょっと騙してやろうと思って、こんな嘘をついてみました。

「今日、スーパーに行ったらシーラカンスの刺身が売ってたよ」そう言うと、当時中学1年生になったばかりの長女が、「えっ、本当?」と言うので、「そうそう、初めて見た。珍しいよね～」と言うと、「へーっ、スゴイ」という答えが返ってきて、こちらが肩透かしをくらってしまいました。

「そんな簡単に信じちゃだめだよ」と内心思いながら、うまく騙せてシメシメと調子に乗った私は、今度は夕食でチキンを食べていた時に、「実は、今日の肉はダチョウの肉なんだよ。けっこう美味しいね」と言ってみました。すると、これまた普通に信じたあげく、「どこの肉なんやろう、モモ肉かな」とか言い出したので、さすがにこのままではまずい、明日学校へ行った子どもたちが恥をかくかもしれないと、私の方が焦ってネタバラシするはめになってしまいました。

シーラカンスもそうですが、その日は一緒にスーパーに行って、長女が「今日はチキンソテーが食べたい」と言うから目の前で鶏肉を選んだはずなのに、親の言うことを疑わないのが良いのか悪いのか。子どもの心の素直さ、柔軟さに、こちらが驚かされた次第です。

ちなみに、友人の牧師にこの話をしたら「お母さん、それはワシントン条約違反ですよ、と突っ込んで欲しかった」と無茶なことを言っていました。我が子がそんな冷静に論破してくる子どもじゃなくて良かったです。

そもそも、聖書のみならず、世間一般でも「疑う」ことは良くないことだと受け止められがちです。疑い深いというのは、相手を信頼していない、素直に信じようとしない、そういうマイナスイメージをもたれます。特に宗教の世界においては、「信じなさい」と言われることはあっても、「疑え」と言われることはめったにないのではないのでしょうか（同志社大学神学部は別ですが）。

ただ、私は思うのです。聖書には信じられないような神の奇跡や出来事がたくさん出てきます。それをそのまま受け入れることは、普通に考えれば難しいはず。聖書に書かれているからといって、何も考えずに何でもただ素直に信じてしまうなら、それはかえって危ないことではないでしょうか。

「当たり前」を問い直す

それは宗教だけではなく、この世の中や社会でも同じです。今、私たちのもっている常識や当たり前だと思込んでいることが全部正しくて、未来永劫変わらないかといえば、決してそうではありません。

たとえば、歴史がそうです。教科書に載っていることや人物が、実は本当にはいなかったかもしれないとか、事実と随分違っていると後から分かることが結構あつたりするものです。何十年か前に私が学生だった時の教科書と、皆さんの使った教科書では随分違います。例に挙げると、「聖徳太子は実際には存在しなかったのでは」という説が載っていたり、足利尊氏や今テレビで話題の源頼朝とされている肖像画も、実は別人だったと言われているなどです。あるいは戦時中の日本や今のロシアを始め、世界には情報を隠したり恣意的に曲げたり、それこそ「フェイクニュース」が入り混じっています。

聖書の読み方もそれと似ていて、解釈などによって、随分と受け取り方は変わるものです。

昔、学生時代にタイに行った時のことです。昔のタイ語の聖書では翻訳があまり正確でなかったため、「酒を飲みすぎではいけない」という箇所を「酒を飲んではいけない」と訳してしまったそうです。おかげで、タイにいる牧師はお酒を飲めなくなった、と聞いたことがあります。

また、新しい発見や研究の成果によって、これまでの説の誤りに気付くこともあります。たとえば、聖書に出てくるマグダラのマリアという女性がいます。復活したイエスに最初に出会った人物です。このマグダラのマリアのことを、「悔い改めた元娼婦」だと思っている人が多いのですが、実はそれは間違いで、彼女が娼婦だったとは聖書のどこにも書いてありません。

また、このマグダラのマリアはイエスの最も信頼する弟子の一人だったという説もありますが、いずれにせよ女性が男性を差し置いて信仰的リーダーになっていくとまずいので、真実でないレッテルがマリアに貼られたのではないとも言われています。そもそもイエスの弟子は十二人だけでなく他にもたくさんいて、その中には女性の弟子たちもいたというのが現在の聖書学の世界での通説になっています。

このように、聖書一つとっても、けっこう思い込みやイメージが先に立っていて、「本当にそうなのか」と

疑って読んでみると、実は全然違ったということもあるのです。

トマスの「疑い」

今日の聖書箇所に出てきたトマスも、ただ人から聞いたことをそのまま鵜呑みにするのではなく、自分の頭で考え、自分の目で見ないと信じない、と言いました。

聖書をただなんとなく読んでいると、「なんだ、トマスはイエス様が信じられないなんて不信仰なけしからん奴だ」とつい思いたくなってしまいますが、よく考えてみれば、人間が復活したと聞いて素直に信じられる人が一体どれだけいるのでしょうか。そう考えると、トマスの反応はむしろ非常に正直でまっすぐなものだったと思うのです。

分かっていないのに、心の中で疑っているのに外面だけ分かった振りをするより、トマスはよっぽど正直な男だと思います。何より、彼の疑いは「信じたい」、でも「そんなことありえない」という、相反する思いからくるものではなかったでしょうか。

私は彼の疑いの背後に、ただ単に「人が生き返るはずがない」という常識に反するとの理由だけでなく、彼の抱えていた負い目も影響していたのではないかと考えています。今日の箇所の直前で、先にトマス以外の弟子たちのところに復活したイエスが現れ、「あなたがたに平和があるように」と告げ、「罪を赦しなさい」と語ったシーンが出てきます。その話を聞いたトマスはどうしてもそれが納得いかなかったのではないのでしょうか。なぜなら、ほんの数日前、自分たちはイエスを見棄てて裏切ったからです。イエスはそのせいで死んだ。たった一人で、何時間も十字架の上で苦しんで死んだのです。

そんな風にイエスを見棄てて裏切った自分たちのところに、イエスが現れた。復讐や懲らしめをするために甦ったというならまだしも、一言も責めることなく平和を告げ、罪を赦せと言うのです。トマスの心の中では、自分の犯した罪やこれまでの生き方をどう計算しても、赦される罪ではない。ありえない出来事だったのではないのでしょうか。

ひどい裏切りと罪。その結果与えられたものが、罪の赦しであり、永遠の命に至る救いの道であった。どう計算しても、どう考えても、疑っても、人間の常識で考えている間は決して理解できないことです。しかしそれが、イエス・キリストが復活して来てくださることによって初めて明らかにされた。それが復活のイエス・キリストに出会うということ、彼によってもたらされた福音（良い知らせ）だったのです。弟子たちは、後になってそのことに気付かされていくことになりました。

イエスはそのように、ただ聞いただけでは素直に信じられなかったトマスのために、再び会いに来てくださいました。そして彼を責めるのではなく、彼の前に「さあ、見てご覧なさい」と十字架の傷跡を示されました。イエスは、信じられないトマスの弱さや疑いを否定するのではなく、その思いをしっかりと受け止め、そのような弱さや疑いさえも受け入れて、たった一人のために応えてくださったのです。そう考えると、私たちも聖書を読む時に、無理やり分かったような顔をするより、もっと積極的に疑問をぶつけてもよい気がします。「求めなさい。そうすれば、与えられる（マタイによる福音書7章7節）」のですから。

「疑い」から信じる者へ

しかも、この聖書のメッセージは、ただ疑うところでは終わらず、もう一つ先へ進みます。それは、私たち

が最終的には「見ないで信じる者」となることです。

何も考えずに目を瞑り自分の心をごまかして信じるのではなく、しっかりと自分の目で見、耳で聞こうとし、疑い迷いながらも、神さまの姿や力が見えなくても最終的にはその救いと赦しを心から信じること。私たちは皆、聖書を読むたびに「目に見えないけれども大切なものが確かにあることを、お前は信じるか」と問われているのです。

この信仰における疑いについて、作家の遠藤周作さんがこのような言葉を残しています。

「若いころ、神様の存在を疑ったときは、いろんな本を読みました。ここに何かが存在すれば、その原因があって、さらにその原因があって、またその原因があって……、その第一原因が神だという、神の存在の証明法—中世のトマスの哲学書などを一所懸命読んだりしました。

いまは、そういうことはあまり考えません。つまり神が存在するという前に、神でも仏でも、自分の心の中にそういうものが働いているかどうかということが問題です。(中略)

くりかえして言うと、神の存在ではなくて、神の働きのほうが大切だということなのです。」

聖書は、疑うことをタブーとしてはいません。むしろ正直に疑ったり迷ったりすることを通して、私たちは真理に近づいていくのではないのでしょうか。

何より、神さまは私たち人間がちよっと疑ったくらいでその存在を危うくさせたりしません。ですから、私は牧師ですが、聖書の信ぴょう性を語って誰かを説得したり、神の存在を証明しようとする必要をまったく感じていません。

本当にそうなのだろうか。自分の思っている神さまやイエスさまは、本当の姿なのだろうか。聖書の話だって、自分や牧師の解釈だけが正しいとは限りません。その意味で、疑いが新しい発見や真理へ導いてくれるきっかけとなることもあるのです。

「疑い」のススメ

もちろん、一人ひとりの人生においても、世界においても、どんなに考えても答えの出ないことがこの世にはたくさんあります。

なぜ、人と人とは争うのか。

なぜ誰もか願っているのに、平和が訪れないのか。

理不尽に奪われる人の命や生活など、世界はなぜこんなにも不平等なのか。

この世には、そんな風に答えの出ないことの方が多いでしょう。

だからといって、問うことをやめたらそこで終わりです。私たちは常に問い続け、常識を疑い続けることを放棄してはなりません。日々、溢れるほどに飛び交うニュースや情報の中で、真実は何か、本質は何か、そこにいる隣人^{となりびと}のリアルはどこにあるのか、そこで本当は何が起こっているのか。自分の頭で考え、自分の目で見ようとする姿勢が求められているのではないかと思います。

そうやって考え続けた先に何かあるのかは分かりませんが、その先に真実があると信じて歩み続ける中で、必ず神さまが道を備え、復活の主が待っていて、私たちを良い方向へ、真理へと導いてくださると

私は信じます。そして、そのように問い続ける歩みの中でふと立ち止まった時に、皆さんの心の中にも確かに神さまが働いていることに、はたと気付かされる、そんな日が来ることを祈り願っています。

〔注〕

1 遠藤周作『私にとって神とは』光文社 1988年 27—28 頁

2022年5月18日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録